

令和3年度徳島県立総合高等学校とくしま政策研究センター 外部評価委員 所見一覧表

番号	調査研究名	所見
1	未利用資源活用による地域産業の再興	<ul style="list-style-type: none"> ・県南部で広く行われていた広葉樹林の「こりき林業」を知る良いきっかけになったが、いつからいつまでどれぐらいの人が携わってきたかという歴史的考察がもっとほしかった。 ・林業の根本的課題である「担い手不足」に対する具体的方策にも切り込んでほしかった。 ・ドローンを活用した森林資源調査は高く評価する。原材料となる常緑広葉樹がどれぐらいあるのかを類推することは有益で先端技術を使い、ウバメガシなどの資源量を本単位まで調査・分析したのは画期的だと思う。 ・未利用資源を生かした地域産業の再興を掲げる以上、地域と連携した協議会の設立は不可欠。講演会や意見交換会をさらに深化させ、若者を巻き込んだ活動の輪を広げてほしい。 ・長期的に樺木林業を継続するためにドローンを活用するにあたって、費用の面についての調査を期待したいです。 ・県南部の特性を活かした取り組みである。 ・H30年に「林業遺産」として認可されており、「樺木林業」は370年余りの歴史があると聞く。 ・今後ドローン技術の活用や他の先駆的な技術を活用を利用しながらより精度の高い調査を求められる。 ・現状調査を同時に樺木林業の担い手の育成が急がれる。調査研究を施業の担い手が相まってこそSDGsが見えてくる。 ・未利用資源についての着目は評価できる。 ・持続や復活のための調査であると思うが現状の生活における活用場面などの考察も同時に知りたいと感じた。 ・ワンステップすすめていただきたい。
2	にし阿波エンカルワークーション推進プロジェクト	<ul style="list-style-type: none"> ・にし阿波地域はワーケーションを進める上でポテンシャルが高いと考えており、時流に合ったテーマとして評価したい。 ・これまで、急傾斜地農耕システムなどの調査研究からステップアップできている。 ・高校生が「食と農の名人」の自宅を訪問し、話をじっくり聞いて記録に残すという手法は大変良い。聞き取りもよくできており、若者たちも郷土愛をはぐくむとともに、地域の良さを再発見できたのではないかと。 ・3回にわたるプロジェクト会議の内容も充実しており、11のモデルコースも色々意見を出し合って練り上げた様子がかがえる。 ・観光資源・地域資源を強みにし、ワークショップや体験会をなど多岐にわたる取り組みは高く評価する。 ・数種類のモデルコースを具体的に作成することにより、ワーケーション制度の導入を検討をしている企業に具体的な提案をすることが可能となります。また、地元の高校生が「食と農の名人」に直接会って取材することにより、文化を継承することの大切さに気づき郷土愛を育むことができたことは、予想以上の効果があったと思われます。 ・令和元年より取り込んできた調査研究がエンカルワークーションへ繋がり、1つの成果となった。 ・特に、地元の高校生たちの取材や記録を実践したことには、大きな意味があると評価したい、彼らの内に培われた郷土への思いこそが次世代にむけての大きな財産である。 ・にし阿波地域や地域に暮らす人々は大切に守り続けてきた伝統文化は、世界に向けて発信する価値の高いものであると確認する。 ・山地の多い徳島県において、傾斜地農業についてクローズアップすることに利点を感じた。 ・今度の持続や発展に向けての取り組みに期待したい。
3	大学生に対する金属アレルギーの実態調査 -装飾品に対するニッケル表示の標準化を提案し、金属アレルギーの発症予防をめざす-	<ul style="list-style-type: none"> ・「金属アレルギーを予防し、健康長寿を目指す」という高い目標を掲げ、地道に取り組みを進める姿勢は評価できる。 ・行政や消費者に対し、金属アレルギーのリスクを伝えていくことは有益だが、以前の取り組みから大きな前進が見られない印象を受ける。 ・皮膚にトラブルを生かしたアクセサリを今も使っている人が42%もいるのは驚いた。それはなぜなのか、踏み込んだ考察がほしかった。 ・コロナの影響もあったのだろうが、全体として物足りなさ、切り口不足を感じさせる調査研究となっている。細かい点を言えば、資料作りにも雑さがみられ、例えば「2. 一般における調査」「3. 行政への働きかけ」といった見出しが一番下にきているのは読みにくい。 ・アレルギーの発生及び重症化を防止することを目的にニッケル表示の標準化を進めていくこととあわせて、表示の方法についても検討し最大限の効果を得られることを期待します。 ・コロナ禍にありながらも、着実な成果を見ることができた学生のみならず、企業へも対象を広げ、金属アレルギーを認識できる割合が高いことも判明した。 ・関係団体や関係機関との連携を回りながら、ニッケル表示の標準化を目指して、努力してもらいたい。 ・啓発をすすめてほしい ・あまり周知のすすんでいない分野だと思うので、アプローチ手法により、業界を巻き込めるよう期待したい。
4	衣料品ロス削減を目的とした消費者教育教材の開発	<ul style="list-style-type: none"> ・衣料品ロスの削減は喫緊の課題であり、消費者教育教材の開発は意義深い。 ・実態調査に基づいた知見を踏まえ、行動変容ステージに応じたモデルをそれぞれつくるという着眼点がいい。 ・動画の制作にはまず既存動画を分析して問題点を洗い出すなど、手間暇かけて制作している様子がかがえ、よくできている。 ・動画の内容は漫画イラストが豊富で分かりやすい。 ・「服を出しっぱなしにした理由」「自分にあった片付け方法」など内容が興味深く、面白い。 ・今後の課題や普及啓発活動について検討しており、完成度の高い調査研究となっている。 ・エンカル消費行動については男女の差、年齢の差、職業の差があるように思う。今度の研究テーマとして期待。 ・身近な衣料品においても、自分に何ができないことはないかと考えていきかけとなりました。 ・衣料品ロスに着目し、消費者である我々一人ひとりにとって身近な教材が提示されたことを高く評価したい。 ・視点を消費者の高さに合わせ、消費者が自ら行動や意識の変革ができるように、気づきを与えてくれる動画であると思う。 ・今後、学業はもとより一般社会人向けの生涯学習講座等においてこの動画を利用してほしい。 ・エンカル消費はよく耳にし、衣料品のリサイクルになども目にするが、根本的な解決のための啓発教材を考えるという視点は最も重要であると感じる。 ・今後、この教材から更に発展し流行という定かでないものを追い求めることのない社会意識の醸成につなげほしい。
5	住まいづくりから考える持続可能な地域づくり ~「家」は誰のものだろうか?~ -「とくしま発! 住まいのエンカル消費行動カード」ものさしの研究開発から消費者教育の発展-	<ul style="list-style-type: none"> ・「住」の分野でエンカル消費に切り込んだのは有意義で家づくりで消費者事業者との格差を着眼点に据えたのも適切と考える。 ・これまでの取り組みの振り替えができており、方向性が明確になっている。 ・カードゲームを深化させ、見える化をさらに図ったのは、消費者と事業者のコミュニケーションをよくする上で大変良い。カードもよくできており、その効果をきちんと検証しているのも評価できる。 ・意識調査を踏まえ、課題として「賃貸用住宅でのエンカル消費の視点」「エンカルと世代収入の関係」を挙げ、今後の展開にも言及している。住環境分野でのエンカル消費普及への取り組みが一層進むことを期待したい。 ・家づくりにおいても、エンカル消費の推奨はハードルが高いと思います。「住まいのエンカル消費行動カード」を用いて、建築価格が高くて、環境に配慮したものの、健康被害の少ないものを選択していくきっかけとなると思います。 ・住宅の取得は人生における最大の消費活動であり、エンカルやSDGsに視点を置き、この問題を分かり易い、手法により捉えていくこの研究の価値は高い。 ・新居の購入を目標としている若い世代やリフォームに関心を示す高齢世代、収入及び住居への思いなど、各層にわたる課題が多々存在する。 ・その中でより実効性を高めるカードゲームやファシリテーターの進化が求められると考える。 ・近年の効率的にエネルギー利用や不安定な社会世界で情勢の中でこのような視点(ものさし)をつくり、知見を広げていくことに非常に有用性と必要性を感じる。このカードについては、更に深化させ、「家をもとうする人だけでなく、子どもから大人まで全国区で意識すべきアイテムであってほしい。今後の取り組みに期待します。
6	木造住宅耐震工事時の消費者トラブル発生防止に寄与する隠蔽部の検査範囲を拡大する機械化検査法の開発	<ul style="list-style-type: none"> ・まずはタイトルが長すぎる。「木造住宅耐震工事時の機械化調査法の開発」で十分わかるし、副タイトル「消費者トラブル発生防止に寄与する隠蔽部の検査範囲拡大策」としたらいいのではないかと。分かりやすい資料作りを心掛けてほしい。 ・現状を課題をきちんと分析されており、フェーズごとの開発の目的や方法も明確だ。 ・民間で開発研究が行われていない2階床下部分の点検ロボットの開発は意義深く、挑戦する価値があるテーマだと考える。 ・事業者も研究成果を評価しており、今後の研究開発の協力が期待される。 ・床下や天井などの隠蔽部は、高さの制限や段差など、建築物によって状況が違ってくるため、次のフェーズの、より実践的な研究成果を期待しています。 ・近い未来必ず発生するであろう南海トラフ地震を想定すると、住居の耐震についての関心は高まるばかりである。 ・一方、耐震診断には、時間や費用がかかるため、その実施に踏み切ることができないのも事実であろう。 ・このような状況下で、コンパクトで高性能なロボットの開発は安心安全を求める我々の住居空間にあってしっかりその機能を発揮することにより価値を認められる。 ・フェーズ1からフェーズ2へ、そしてフェーズ3までの達成に期待がもたれる。 ・住宅の耐震の必要性がさげばれつつも旧住居についてはなかなか進行しないことも受けつつ、先進的なアプローチで技術開発をすすめており、有意義な取り組みと感じた。関係するメーカーなどの協働もはかかれているとのこと、とても期待できる研究である。